中等教育研究開発室年報　第 34 号（2021 年 3 月 31 日発行）別冊電子版
2020 年度　授業実践事例

国語科　高等学校第Ⅰ学年

「水の東西」（山崎正和）
日本文化を語る言葉を探す―「水の東西」を手がかりに―

授業者　加藤　健伍

（校内研究授業）

広島大学附属中・高等学校

高等学校　国語科　学習指導案

指導者　　加藤　健伍

日　　時　令和２年７月６日（月）　第４限（11：40～12：30）
場　　所　多目的教室
学年・組　高等学校Ⅰ年１組　41 人（男子 20 人，女子 21 人）
単　　元　日本文化について語る言葉を探す
教　　材　「水の東西」（山崎正和）『国語総合　現代文編』（東京書籍）所収
目　　標　1. 対比構造を整理し，文章の論理の展開の仕方をとらえる。
2. 叙述を基に筆者のものの見方や考え方を読み取る。
3. 本文を基にして新たな課題を設定し，探求しようとする姿勢をもつ。

指導計画（全 5 時間）

第一次　本文を「東」について述べている記述と「西」について述べている記述とに色分けし，対比構造を意識して「流れる水と，噴き上げる水」までを読む。（1 時間）
第二次　「時間的な水と，空間的な水」までを読む（1 時間）
第三次　「見えない水と，目に見える水」までを読む。（1 時間）
第四次　最後まで読み，本文を基にして新たな課題を設定し，交流する。（2 時間　本時　4/5）

授業について

昨年度，国語科では「国語科における『探す』ための『学び』」をテーマに掲げ，「探す」ために教科で何を「学ぶ」のかを探っていった。「探す」の出発点は「課題の設定」であり，換言すれば「問いを立てる」ことである。1 年間かけて，生徒から出た「問い」を学習の中心に据えて授業を構想していった。

今年度も「問い」を中心にすることは変わらないが，授業者個人の試みとして，単元の終末に新たな「問い」を持つような授業構想をしていきたい。「探究」していくために自らの「問い」を出発点として学びを駆動させていき，テキストをしっかり読み込んでいく。そうしてはじめに立てた「問い」を深め，解決していくことで，テキストの主題や書かれ方に関わる新たな「問い」が立ち上がってくる。このように，新たな「問い」が立ち上がってくるような授業ができれば学びが深まったと言える，と考えるのである。国語科における「探究」とはこのように，テキストと関わり，「問い」を持ち続けることがカギであると考える。延いては教科等横断的な学びや学校段階間接続なども視野に入れ，広く共有される「学びの地図」を描けるようなカリキュラム開発を目指す。

本文は元々「産経新聞」の夕刊に掲載されたものであり，評論と言うよりは随筆としての要素を強く持つ。しかしそこに明確な対比構造を持つが故に，高等学校初期段階での評論の定番教材として扱われている。そこで，対比構造を読み取りつつ，随筆としての読みも意識し，叙述を基に筆者独自のものの見方・考え方に迫る授業を構想した。

さらに，筆者のものの見方・考え方に迫ることができれば，筆者の発想にならって，学習者たちは自身で課題を設定していくことが可能になるだろう。この段階で，先に述べた新たな「問い」を獲得することになる。筆者は本文の「流れる水と，噴き上げる水」「時間的な水と，空間的な水」「見えない水と，目に見える水」のいずれもで，常に「東」の内容を先に述べ，「西」の内容との比較を通じて「東」の認識を説明している。これにならって，学習者たちにも自身が美しい，魅力的だと考える日本文化について考えさせ，それと対応する西洋文化と比較させることを通して，日本文化を語る言葉を探らせたい。そうすることで，新たな学びが駆動していき，さらに次なる疑問や課題を生んでいくだろう。学習者は，自ら学びをつなげ広げていく主体となっていくはずである。

題　目　日本文化を語る言葉を探す　ー「水の東西」を手がかりにー

本時の学習目標

1. 文章の論理の展開の仕方をとらえ，筆者のものの見方や考え方を理解する。
2. 本文を基にして新たな課題を設定し，探求しようとする姿勢をもつ。

本時の評価規準（観点／方法）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・文章中の言葉の意味を，文脈に沿って適切に理解すること。 （観察・記述の点検）	・筆者の論理展開や叙述を的確に読み取り，内容を整理していくこと。 ・西洋文化との比較を通して，日本文化についての自分なりの意見をもち，それを語る言葉を探ること。 （観察・記述の点検）	・内容を的確に読み取り，ものの見方や考え方を広げようとすること。 ・新たな問いを積極的に設定し，探求しようとすること。 （観察・記述の点検）

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
〈導入〉 本時の内容を確認する。		・前時までに，対比構造を意識しながら読解してきたことを伝える。
〈展開〉 ・筆者の「鹿おどし」に対するものの見方・考え方をとらえる。	・「積極的に，形なきものを恐れない心」を考える。	・「自然に流れる姿に美を見出す」と捉える。また，西洋は「定まった形のないものを，積極的に造型しようとしていたこと」を確認する。
	・「日本人が水を鑑賞する行為の極致」を考える。	・「水を見ることなく，水を感じる」という鑑賞の独自性を確認する。また，「我々」にも着目し，新たな「問い」の設定につなげていく。
・本文を基にして，新たな課題を設定する。	・日本文化について考え，西洋文化との比較を通して新たな「問い」を設定する。	・まず興味や関心のある日本文化を挙げ，対応する西洋文化と比較することで見えてくるものを考えるよう促す。 例：日本の名付けと，西洋の名付け
〈まとめ〉 次時への予告を聞く。		・次時ではそれぞれの設定した問い共有し，交流してみることを伝える。
備考		

新たな問い　一覧

日本文化	西洋文化	テーマ
将棋	チェス	ボードゲーム
J―POP　和の音楽	A―POP　西洋音楽	音楽
昆布をだしに使う	昆布を肥料にする	昆布
うちわ	扇風機	風の起こし方
すする	すすらない	めん
戦のための実用的な	華やかな実用的でない	城
日本酒	ワイン	お酒
和室	洋室	家
障子　ふすま	窓　ドア	家屋
風鈴　風車　たこあげ	風見鶏　風車	風
坊主に統一	個性的（放任）	高校球児の髪型
和食／神社	洋食／教会	食／建物
浮世絵	西洋画	絵画
花火	鉄の成型	火
日本庭園　枯山水	宮殿	庭
まんじゅう		食
刀	剣	武器
将棋	チェス	ゲーム
落語	劇	語り
鐘	ベル	
漬物　干物	ジャムなど	保存食
平屋　たたみ　座布団　こたつ	2階建て　フローリング　イス　暖炉	家
城郭	城	城
楽器　音楽における服	楽器　オペラ	音楽
おじぎをする	ハグをする	あいさつ
生け花	フラワーアレンジメント	花
風鈴	扇風機	
和服	洋服	衣服
着物　生地の柄・模様	ドレス　レースやリボン	服
日本庭園	西洋の庭園	庭園
浮世絵　大和絵　二次元	ルネサンス　写実的	絵画
着物	ドレス	衣服
日本の家屋	西洋の家屋	家屋　建物
勝敗よりも礼儀	勝敗がハッキリとつく	スポーツ
水墨画	水彩画	絵画（書道）
浮世絵	油絵	絵
茶を作るところ	茶にいろいろ入れる	茶道
水墨画	水彩画	絵画
和菓子	洋菓子	お菓子

実践上の留意点

１．授業説明

本授業ではまず，本文で書かれている日本の「鹿おどし」と西洋の「噴水」とに見られる，それぞれの文化のものの見方を押さえていった。「鹿おどし」は「自然に流れる姿に美を見出」したものであり，「噴水」は「定まった形のないものを，積極的に造型しようとしていた」ものである。筆者は「鹿おどし」を「水を見ることなく，水を感じる」「鑑賞する行為の極致」であるとする。またそうした考え方を「我々」のものであるとして，読者を筆者と同じ文化やものの見方にあるものとして扱っていることを読み取っていった。

本文の読み取りを終えた後に，学習者それぞれが興味や関心のある日本文化について挙げ，対応する西洋文化と比較するよう促した。考える時には本文と同じく，まず日本の文化だと考えるものや伝統的な文化を挙げ，それに対応する西洋の文化を考えるようにした。挙がったものの例は「日本画と西洋画」「お茶の文化の違い」「家・家屋・建物」などである。扱い方としては，日本文化を優れたものとして考えないようにし，文化の違いに優劣をつけるのではなく，そうした文化をもつ日本や西洋がどういったものの見方をしているのかを推測してみるようにした。本文を読んだ後だからこそ自分たちの身の回りのものに新たな課題を発見することができる，ということをこの学習活動の意義として考えた。

周囲の３～４名程度の小集団で交流をしながら考えを出していき，その後クラス全体で発表することで交流を行った。なかなか適切な例を思いつかない学習者もいたが，こうした活動の結果，何も書くことができなかった学習者はいなかった。一方で，「風鈴と扇風機」といったように，適切な対比関係を作ることのできなかったものもあった。

こうして新たな「問い」を設定して考え始めてみると，国や地域の違いといった東西比較だけではなく，過去との違いといった古今比較の必要性も生じ，次々に「問い」が生まれていった。例えば，宗教について考えた際に，それが仏教や中国文化の影響を受けたものであるとした時に，日本の文化と考えていたものにも，古今の違いがあることが発見された。しかし，これらについては時間の都合で吟味できなかった。

２．研究協議

ここで挙がってきた学習者の考えや意見について，本当に例として適切かどうか，裏側にあるそれぞれの文化におけるものの見方・考え方はどのようなものか，といったことを考えようとすると，本文以外の文献や情報にあたる必要性が生じる。それを調べていき発表する，という学習活動を仕組んだときに，それは果たして国語科の学習と言えるだろうか。本実践ではそうした調べ学習を行わなかったが，それゆえに不確かな推測や，既存の知識を発表するだけの実践になってしまった。説明的文章教材で本文を離れて考えていこうとすると，この問題にいきあたってしまうだろう。今後もこの問題の構造や打開策を考えていきたい。

また，本文を大切にして読んでいく，ということは国語科の学びには不可欠である。しかしそれは，本文を聖典として読み，いつも本文を正しいものとして扱う，という意味ではない。批判的に読んでいくことも，時には重要な読みの姿勢である。本実践では，本文で扱われている内容について，新たな「問い」を主体的に見つけていこうと活動していたが，そもそも本文の読み取りの際にこうした批判的な姿勢をもたせることができなかった。研究協議では，本文で納得のいきづらい内容に批判的な目を向け，筆者の論理展開を疑っていく姿勢が欠けていたことへの指摘を受けた。単元末の活動に向かうがあまり，結局は本文を大切に読むことができていなかったのである。

課題ばかりが挙がってくるが，これからも本文を大切にして読んでいきつつ，本文の内容から発展していくような学習活動や学びのあり方を目指していきたい。